

自己評価報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20530119

研究課題名 (和文) 戦後日本市民政治の歴史分析

研究課題名 (英文) Citizen Politics in Postwar Japan from a Historical Perspective

研究代表者

中北 浩爾 (NAKAKITA KOJI)

立教大学・法学部・教授

研究者番号：30272412

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：日本政治、市民社会

1. 研究計画の概要

第二次世界大戦後の日本の市民政治を、歴史という縦軸と、比較政治という横軸のなかに位置づけ、分析することが、本研究の目的である。なぜ戦後日本で西欧諸国よりもいち早く市民政治という概念が提唱されたのか、市民派がどのようにして台頭し、後退したのか、といった論点を解明することを通じて、現代日本政治の特質を明らかにすることを目指す。

2. 研究の進捗状況

下記の「代表的な研究成果」欄に言及しながら、進捗状況をまとめる。

(1) 市民政治が登場する背景の分析については、自民党政権に関する分析として論文③を発表し、社会党をはじめとする革新陣営の動向を論じるものとして図書②を刊行した。とりわけ前者によって、市民政治が批判の対象とした利益誘導政治の成立について、実証的に明らかにできたことは、本研究の前提として重要であった。

(2) 現在の日本政治は、市民政治の後退の結果として成立したと考えられるが、これについて論文①②、図書①を執筆した。1970 年前後から、都市の無党派層が登場し、国家機能の抑制が図られたが、それに対応して、市民参加と市場競争という二つの社会モデルが登場し、その後、市民参加＝市民政治の後退を受けて、市場競争＝新自由主義が台頭したという歴史的流れの上に現在の日本政治を理解すべく、市場競争型デモクラシーという概念を提示した。2009 年の政権交代と重なったこともあって、比較的大きな反響を得ることができた。

(3) 市民政治、そしてその登場のインパクトを受けて保守陣営で登場した日本型多元主義について 2 件の学会報告を行った。市民政治の重要性は、それ自体に限られず、1970 年代末の自民党政治の再編（自民党総裁予備選挙の導入など）、その結果としての 1980 年代の保守復調に大きな影響を与えたことから理解されなければならない。二つの報告はいずれ論文として発表される予定だが、市民政治を中心とする日本政治の歴史的な見取り図を現在まで描くものとして、学界に一定の貢献をするものだと考える。

(4) 市民政治に関する概念、およびその比較政治的な位置づけについては、論文・図書や学会発表のかたちで公表するには至らなかったが、継続的に分析を行っている。その成果は、現在執筆中の単行本の序論に組み入れたいと考えている。

(5) 以上の研究成果を発表する上で必要な資料収集を積極的に行った。また、この間、個人の研究用のホームページ開設し、研究成果の公表に努めている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。(理由) 基礎的な資料の収集をほぼ終了し、論文や学会での報告を通じて、一定の成果を発表してきた。

4. 今後の研究の推進方策

最終的な目標は、分析結果を個別的ではなく統合して、単著 (図書) として公刊することにある。これまでの 3 年間の研究成果を基礎として、残り 2 年間は、その執筆作業に力を注ぎたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①中北浩爾、市場競争型デモクラシーへ、現代思想、査読無、37巻13号、2009年、134-131頁。

②中北浩爾、政権選択のその先へ、世界、査読無、795号、2009年、109-117頁。

③中北浩爾、自民党型政治の定着、年報日本現代史、査読無、13号、2008年、1-28頁。

〔学会発表〕(計2件)

①中北浩爾、日本型多元主義の歴史的位置、東京大学政治史研究会、2011年1月22日、東京大学本郷キャンパス。

②中北浩爾、市民参加と市場競争のあいだ、同時代史学会、2010年12月4日、成城大学。

〔図書〕(計2件)

①共著、中北浩爾、ミネルヴァ書房、労働と福祉国家の可能性、2009年、14-30頁。

②単著、中北浩爾、岩波書店、日本労働政治の国際関係史、2008年、390頁。

〔その他〕

・個人研究用ホームページ

<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/kojinakakita/index.html>